

ペーパーバックの楽しみ

高橋 充

大きな悲しみ

今年になってから作家の訃報が続いた。

Robert B. Parker	(1932-2010)
Erich Segal	(1937-2010)
Dick Francis	(1920-2010)
J.D. Salinger	(1919-2010)

いずれも長い間その作品を繰り返し読んできた、愛すべき作家たちである。

もう数年さかのほればさらに愕然とする。

Arthur Hailey	(1920-2004)
R.D. Wingfield	(1928-2007)
Sidney Sheldon	(1917-2007)

友人からの情報や、いくつかの雑誌が発表するミステリー小説の年間ベストに選ばれた作品をきっかけに入り込み、初期までさかのほって読み、新作を待って、読み続けた作家ばかりである。さらには、菊池光(みつ)も亡くなっている(1925-2006)。ご存じの方も多いと思うが、ParkerやFrancisを一人で訳された名翻訳家である。

読み始めたころ

大学や高校時代の恩師に、「英語教師なら、勉強として英語を毎日読むこと」と言われ、手探りで読み始めたペーパーバックだったが、教師として残された時間があとわずかとなった今、ずいぶん長い間、楽しみや勉強として読んできたものだと感慨深い。お世話になった多くの作家が年齢を重ねて亡くなっていくのも当然といえば当然なのである。

うまく読めない部分があれば、翻訳を読んで迷い込んだストーリーを修復したこともあった。菊池光をはじめとする翻訳家の人たちにはこんなときに大

変お世話になったのである。

大学1年生の夏休みに「文学概論」の宿題が出された。「好きな本を1冊読んでどんな形でもいからレポートを提出すること」というものであった。選んだ本がJ.D. Salingerの*The Catcher in the Rye*で、休み中になんとか苦勞しながら読み通し、感想を書いて提出したことを覚えている。

I'm standing on the edge of some crazy cliff. What I have to do, I have to catch everybody if they start to go over the cliff — I mean if they're running and they don't look where they're going I have to come out from somewhere and catch them. That's all I'd do all day. I'd just be the catcher in the rye and all.

(Chapter 22)

タイトルにもつながっている主人公ホールデンのこんな言葉が胸に迫ったものだ。

教職についてからは、今のようにインターネットで注文すれば、2、3日で本が届くという時代ではなかったので、たまに上京することがあれば、欲しい本のリストを持って本を探し、まとめ買いして送ったものだった。1冊、また1冊と好きな作家の本を読んでいく時間は、忙しい教師生活の中で、息抜きのできる貴重な時間で、何物にも代え難い。後でも述べるが実益もあり、ストレス解消の1つでもある。

小さな楽しみ

部屋の本棚のいちばんよく見える場所に、折々、特定の作家の作品をある限り並べて、眺めている。亡くなった作家を追悼したいときや、好きな作家を急に読み返したくなったときに本を並べ、ときど

き別の作家と入れ替える。そんなことをして何が面白いのか、とかみさんにはあきられているが、小さな楽しみである。

少し前まではJames Joyceの『若い藝術家の肖像』の新訳を出した丸谷才一を讀んで、持っている本を並べ、他の小説や評論も何冊か読み返した。最近、Robert B. Parkerが亡くなったことを知って、彼の小説を40冊ほど並べている。ほとんどがスペンサーという私立探偵のシリーズものである。死を知って、もう新作は読めないのかと残念だった。すぐに*Early Autumn*とその続編の*Pastime*、そして、ウーマンリブの闘士を救う物語*Looking for Rachel Wallace*を読み返した。

*Early Autumn*は両親に育児を放棄されて育ってきた少年とスペンサーの心温まる話である。

Man's gotta do what he's gotta do, boy.
(Chapter 9)

スペンサーはこう言って少年ポールを励ます。さらには、恋人のスザンにこう決意を述べる。

"The kid's never been taught how to act," I said. "He doesn't know anything. He's got no pride. He's got nothing he's good at. He's got nothing but the tube."

"And you plan to teach him."

"I'll teach him what I know. I know how to do carpentry. I know how to cook. I know how to punch. I know how to act."

(Chapter 14)

やがてポールはスペンサーやスザンの励ましを得て、両親と離れ、自立の道を歩み始めるのである。並んでいる本を眺めて、それぞれの物語や読んだときのことを思い出したり、何冊かを読み返して、新しい読後感を得ることは気分のいいものだ。

読書ノート

若いころから読書ノートをつけている。作品名、作者、出版社、ページ数、読み終えた日、感想を少

しである。印象的な部分があればそれも書いておく。関連した書名をメモしておくこともある。この習慣はもう30年以上にもなり、このノートは小さな宝物である。折に触れて読み返したり、同じ本を再読したときは、以前の感想と新しい読後感を比べてみたりする。ルーズリーフを利用しているが、たまってくると分厚いバインダーに移して保存している。バインダーがもう4冊目になっているのだから、相当の年月と蓄積である。

それとは別に、ペーパーバックなどの英語の本からは、気に入った文章やしゃれた会話などをパソコンに入れて保存している。上記の*The Catcher in the Rye*と*Early Autumn*からの引用はこのファイルから選んだものである。ファイル名を「引用ノート」として、こちらは始めて15年ぐらいたががかなりの分量になった。

「引用ノート」の効用

引用した文章を読めばおわかりと思うが、いずれもそんなに難しくない。そのままや、少し形を変えたりして、授業で例文として使うことができる。文法事項に触れながら、例文を提示する。ついでに作家のことや物語を話したりする。実物を示せばさらに生徒の興味は大きくなり、学習意欲も高まるように思う。生徒の力に見合った文章がたくさんあるのでとても重宝している。

冒頭に挙げた惜しむべき作家の文章をいくつか紹介してみよう。

It was always the worst thing I did, talking to the parents of a dead person. It almost didn't matter how old the deceased had been, it was the parents that were the hardest.

(Robert B. Parker Chapter 12 *Hush Money*)

Parkerのスペンサーシリーズはどれも面白いが、依頼人がうまく描かれているときには彼らに気持ち移って、面白さが増す。

The way I'd been taught languages, it took a week for a smattering, three

months for fluency, and two years to bring one to the point of recognizing typical speech and thought patterns when one heard them translated back into perfect English.

(Dick Francis Chapter 5 *Blood Sport*)

Francis はほとんどが競馬に題材を求めている。不屈の男たちが事件解決のために活躍する一線級のハードボイルドである。

"Hey, come on, ambition is a normal human feeling," he answered. "I mean, if George Washington hadn't been ambitious, we'd probably still be talking British. Dig?"

(Erich Segal Chapter 5 *Doctors*)

Segal は *Love Story* がなんと言っても代表作だが、他の作品もストーリーが良く、知的で洗練されている。

Frost snorted. 'As I've told you a million times, lads, every time a teenage girl goes missing from home, the parents swear blind she's a pure, sweet, home-loving girl training to be a nun, and nine times out of ten they turn out to be little scrubbers, on the game, pumping themselves full of coke, who've run away for the umpteenth time.'

(R.D.Wingfield Chapter 2 *A Killing Frost*)

Wingfield の描く警部フロストは上司の言うことを聞かない厄介者だが推理にすぐれ、ついには彼のおかげで事件が解決する。

Mark Twain said that when the world came to an end, he wanted to be in Kentucky, because it's always a good twenty years behind.

(Sidney Sheldon Chapter 1 *The Best Laid Plan*)

多くの作品がヒットして日本でも大きなブームになった Sheldon は文章が平易でわかりやすく、とにかく面白く読ませる。高校生でも十分理解できる英語である。それぞれに味わいのある一言一句で、生徒たちには読書案内や小さな教訓になったりする。

読み方の工夫

かつては通勤のときに読んだりしたが、ゆれる電車で細かい文字は、次第に辛くなっていた。加えて車で通勤せざるを得なくなった。そこで最近、朝のうちに自宅で読むことにしている。5時過ぎには目が覚めるので、1時間ほどを読書に使い、1日を始めることにしている。

どんな本でも、人物の関係や状況が良くつかめるまでは手元に置いている愛用の辞書を引きながら読む。いまだに人名が頭にすんなりと入らず、ストーリーや登場人物の関係図を作りながら読んでいく。次第に背景がわかり、作者のスタイルもつかめてくる。そうするとスピードも速くなり、辞典も、何度か出てくる重要そうな単語を1日に1、2個引く程度になる。

物語にもよるが、細かいところはあまり気にしないことが多い。読み進んでいくうちに前の部分の細部がわかってくることもあり、何とか最後までストーリーはたどっていける。先にも書いたが、翻訳で補うこともある。読み返したいお気に入りの本もたくさんあり、これからの楽しみである。

新しい作家を探して

好きな作家が亡くなって悲しんでばかりはいられない。新しい作家もいろいろ探している。今の一押しは Michael Connelly で、ハリリー・ボッシュという刑事のシリーズである。 *Lost Light* (『暗く聖なる夜』) が海外ミステリー小説の年間ベストに選ばれたのをきっかけに読み、とても面白かった。組織になじめない、暗い過去を抱えたハリリーは、障害を乗り越えて事件に迫り、真犯人にたどりつく。

Every case is a battle in a war that never ends. Believe me, you need something to carry with you every time you go into the fight. Something to hold on to, an edge that drives you or

pulls you. And it was her hands that did it for me. I could not forget her hands. I believed they were reaching to me. I still do.

(Michael Connelly Chapter 2 *Lost Light*)

この作品がとても気に入ったので、1作目の *The Black Echo* に戻り、順に楽しみながら読んできた。14作品のうちの12作目 *Echo Park* に今、挑戦しているが、これも面白い。ハリーは前々作で一端、ロサンゼルス警察を退職するが、再雇用で職に戻り、からまった糸をほぐすようにして未解決の殺人事件に取り組んでいる。このシリーズ以外にも面白い物語を書いているので、そちらも楽しむつもりである。

ほかに、*The Bone Collector* をはじめとして手足が不自由な捜査官リンカーン・ライムのシリーズを書く Jeffery Deaver, *The Da Vinci Code* が大ヒットし、新作の *The Lost Symbol* も出た Dan Brown, *A Simple Plan* や *The Ruins* の Scott Smith, *Long Time Coming* などの史実とフィクションを織り交ぜ、時代を超えた物語を展開する Robert Goddard など、いずれも面白いと思うし、彼らの新作にも期待している。

勉強の大切さ

今年は教職38年目で、定年を迎える最終年となった。長かった道に思いも多い。教師の仕事は幅が広く多岐にわたっているが、本業は英語の教師、と

いうことは忘れてはいけないと思う。授業には最善を尽くすべきだし、英語の勉強は怠るべきでない。

いろいろな勉強のしかたが考えられるが、その1つとして教科書以外の英語にできるだけ触れるということがある。体験的にいえることだが、生の英語にどんな形でも毎日触れる必要がある。英字新聞を読むのもいいし、物語を読むのもいい。毎日のニュース番組や映画などの映像を見るのもいい。継続は力である。それが自分の力となり、生徒へと還元されていくのである。

参考文献

- Connelly, Michael. *Lost Light*, Warner Books, 2003
- Francis, Dick. *Blood Sport*, Pan Books, 1967
- Parker, Robert B. *Early Autumn*, A Dell Book, 1981
- Parker, Robert B. *Hush Money*, Berkley Books, 1999
- Salinger, J.D. *The Catcher in the Rye*, Penguin Modern Classics, 1951
- Segal, Erich. *Doctors*, Bantam Books, 1988
- Sheldon, Sidney. *The Best Laid Plan*, Warner Books, 1997
- Wingfield, R.D. *A Killing Frost*, Corgi Books, 2008

(秋田県立大館鳳鳴高等学校校長)